



公開セミナー記録
「セミナー断章」
『治療技法論』

2012年5月

講義：藤田博史（精神分析医）

[目次へもどる](#)

セミナー断章 2012年5月12日講義より

講義の流れ～第5回講義（3時間）の内容の流れを項目に分けて箇条書きにしました。今回、「セミナー断章」で取り上げているのは、水色の部分です～

第5講：「《ラカン理論は臨床に使える》というデマについて、《困ったラカン理解者》の具体例」

精神分析の治療技法→精神医学とフロイト→現場における治療と薬→精神分析を最初に日本にもたらした古澤平作について→告白文化の土壌のない日本における精神分析の問題→欧米人と日本人の自由連想の違い→視覚的な自由連想と聴覚的な自由連想→分析室における窓と枠の意味→ジャック・アラン・ミレールの分析室→ジャック・ラカンの分析室→ラカンは臨床に使えるというデマゴギー→精神分析とフィクション→「ラカンは臨床に使える」というテーゼの真偽問題→固有名と来歴否認→「ラカンは臨床に使える」というデマゴギーの意図→ラカンの症状→ラカン思想理解のために必要な知識→日本におけるラカン理解の諸相→フランスのラカニアンの特徴→ソシュールとラカン→ヴィトゲンシュタインとソシュール→ラカンとヴィトゲンシュタイン→自前の思想の可能性と限界→共通言語と科学→フィクション内フィクション→ラカンと日本のフェミニズム→メルロ・ポンティとラカン→ラカンのリチュラテールについて→ファルス享楽と大文字の他者の享楽→ファルスとファルスもどき→シニフィアンとサンブラン→法と女性→ファルスもどきと隠喩作用→制止・症状・不安→後期ラカンと補填の問題→倫理、道徳、献身→美学と献身→倫理から献身へ→献身と身体の関係

ラカンは臨床に使えるというデマゴギー

今日は「ラカンは臨床に使える」という一つのデマゴギーについて、そして「困ったラカン理解者の具体例」についてお話をします。

「ラカンは臨床に使える」と声高にあるいは小声で口にする人たちがいます。断定が先行してその証明が為されていない。「何々らしいよ」という形で断定だけが一人歩きしている。「ラカンは臨床に使える」という一つのテーゼの真偽について検証している人はいません。論理的に言えば「真偽問題」。しかしながら真偽を確認しないままに拡散してゆくデマゴギー、このようなデマゴギーに扇動されずに一人一人が冷静に真偽を確かめてゆくことが重要なのでしよう。

ですから「ラカンは臨床に使えるということについて」という今日のテーマのなかには、いくつかの異なる水準の問題が混在しています。一つはデマ、デマゴギーが批判的な検証も無くなぜ容易に伝搬してしまうのかという問題があります。実際、過去にこんなことがありました。「この人たちは創価学会員です」という名簿のリストがネット上で流布したのです。そこには多くの芸能人の名前が掲載されていて、例えば、それを見た愛川欽也さんは急いで公

に否定したりしました。これもデマゴギーの一例です。おそらくそこには何者かによる創価学会に対する政治的な意図が働いていたのでしょう。デマゴギーという言葉はもともとドイツ語ですけれども、本来の意味は政治的な策略とか目的をもって流される人為的な嘘とか噂のことです。（ホワイトボードに書く）

Demagogie

ご存じのようにieをyにすれば英語になります。デマゴギー。政治的な意図を含んだ嘘。日本語では流言飛語とか言いますね。流説とか、風説とか。人はウワサが好きですね。なぜでしょうか？さらに政治的な意図が明らかになった用語がありますね、何でしょうか？

聴講者 プロバガンダ。

そうです。プロバガンダは明らかに政治的意図をもって遂行される。なぜでしょう、人は嘘が好きなんですね。特に女性は嘘が好きのように見えます。中島みゆきのアルバム『寒水魚』のなかの「歌姫」という歌にこんな歌詞があります。

男はいつも嘘がうまいね
女よりも子どもよりも嘘がうまいね
女はいつも嘘が好きだね
昨日よりも明日よりも嘘が好きだね

「人は嘘が好き」という一つのテーゼ。「ラカンが臨床に使えない」というデマゴギーについて考える場合、まずはなぜ人はデマゴギーを口にしてしまうのか、デマゴギーの伝搬人になってしまうのか、ということです。その理由の一つは「言葉は嘘をつくための道具である」からです。言葉の基本機能は嘘をつくこと。こういってよければ、言葉は虚構を創り出す装置なのです。言葉が嘘を生成するからデマゴギーが成立する。つまりわたしたちははじめから嘘をつくべく装置を内部に持っているのです。だからその機能を正当に使っているに過ぎないのです。言葉は嘘をつくための道具、これが基本です。恋人同士で「君のことを愛しているよ」「好きだよ」とか「もう君しかいないよ」とか言い合ったりしますが、すべて嘘ですね（笑）。

聴講者 この前、フランスのバーでフランス人が「永遠の愛」って刺青をやっていましたけれどね。漢字を間違えましたね（笑）。

「永遠の愛を誓う」というのは嘘ですね。ただし願望ではありますが。「ええ、でも先生、その時は真剣でした」って言い訳をするのですが、それは言葉に騙されていたけなんですね。愛はフィクション。絵空事。誇張された人工的な産物です、愛の具体的な表現法は「あなたが世界で一番」という言い方です。思い込みです。自我が言葉に思い込まれているのです。「この人が全て、素晴らしい」と。だから注意深くしていなければなりません。嘘の愛が、愛という名の嘘が、巷に溢れています。わたしたちの周りにも、惚れっぽい人っていますよね。出会う人出会う人を好きになる。これはもう騙されやすい人。自分が自分に騙されやすい人、なのでですね。

精神分析とフィクション

人はなぜ嘘をつくのか。ここで慎重に考えてみると、そもそも嘘と嘘でないこととは何か、ということになります。嘘と言えば全部嘘。言葉で表現されたことは全部嘘です。そしてこの嘘が、嘘を創り出している言葉そのものを裏切るということが起こる。言葉の自己言及性に起因するものです。「わたしは猿です」とか「わたしが今現にしゃべっているのは英語です」とか、いくらでも矛盾を創り出すことが出来る。構文のなかの嘘もあれば、「わたしは一切嘘をつきません」という宣言そのものの嘘もある。日常的に使用する「今日はいい天気ですね」というのも厳密に言えば嘘でしょう。実際の天気とこの言語化された音の連なりとは何の関係もありません。

もし物質界というものを仮定すれば、言葉は常に物質界からちょっと浮いた状態で様々なフィクションを増殖させています。石の上に生じた苔とでもいうのでしょうか。上から見ると、物質界に覆い被さったフィクションのペールが、あたかも物質界そのものであるかのように見えているというわけです。言ってみれば、混沌とした世界の上に言葉という網が掛けられている。しかしながら、仮に真なる世界があるとしても、身体という間接的な世界認識の装置に隔られているわたしたちはそこへ到達することができない。「でも、先生、今、こうして机に触れることができるじゃないですか」と言われるかもしれませんが、しかしながら、この場合も、ものに直接触れているのではなくて、皮膚の知覚器官で生じた電気刺激が、神経を通して脳に「電氣的発火」として伝わっているだけです。いってみれば、わたしたちは、少し浮上したまま走行しているリアモーターカーみたいなものです。現実には着地していません。浮き上がった世界の中で喜怒哀楽の世界をフィクションとして創り出している。

「ラカンは臨床に使えない」というテーゼの真偽問題

ですから「ラカンは臨床に使えない」というデマを誰かが口にした場合、幾つかの水準から精神的な考察がで

きる。一つは何故その人がそういうデマを口にする必要があったのか、ということ。いかなる意図があってそういうことを言っているのか、ということがまず一つ挙げられます。もう一つはその文章の意味内容について。つまり「ラカンは臨床に使えない」というテーゼの真偽問題です。ところが、この真偽をいわゆるわたしたちの現実のなかで確認することは殆ど不可能です。これは「ラカンは臨床に使えない」というテーゼだけではなく、どのような構文でも、どんな文章でも、その真偽を本当に吟味しようとしたら、それは不可能の領域に入ってしまいます。それは何故か。真偽を検証し証明するためには、今言ったリニアモーターカーの浮いている部分の内部だけでは真偽の証明が完結しないのです。もし完結させるとしたら物質との照合関係が必要です。つまり真か偽かという問題において、わたしたちは、何かと照合してみ、合っている、とか、違っている、ということを経験しなければならぬのですが、物そのものに直接触れることが不可能であるから、わたしたちはフィクションの中だけで真か偽かを決定しなければならないような状況に置かれているわけです。

この問題を解決するために、論理学者は様々な工夫をしてきました。たとえば、フィクションの平面全体が浮かび上がっているのではなく、所々が物の平面と鋳で留められていると仮定するのです。そして、この鋳の役割をしているのが固有名であると説明するわけです。たとえば、フロイト、ジークムント・フロイト、ちなみに、元々の名前はジギスムントです。ジギスムント・シュロモ・フロイト Sigismund Schlomo Freud が正式な名前です。このフロイトという固有名と実際の人物を「この人はこれですよ」と繋いでしまう。これも結局フィクションなのですけども、繋いでしまう。いってみればこれは赤ちゃんが生まれた時におこなう洗礼と同じです。洗礼は、固有名を与える、命名の儀式です。

固有名と来歴否認

論理的でなければならない学問のなかに、洗礼という儀式を持ち込むこと。これをおこなったのがソール・クリプキです。彼が書いた『名指しと必然性』という本のなかにこの洗礼 baptisme が出てきます。言葉が指示するところのものであるレフェランと固有名の結合を洗礼と呼んでいます。しかしこれはかなり強引といわなければなりません。固有名を錨のようにものなかに打ち込んでおかないと、これまでの議論がすべて崩壊してしまうかもしれないのです。窮余の策です。

もしここで特定の固有名を挙げて、世界中に聞こえるスピーカーで集合をかけたとしたら、決して一人だけではなく、沢山の同姓同名の人が集まってくるでしょう。そこで、本当に呼び出したい人を選別するには、どこで生まれて、どこで育て、何をしている人で、等々、様々な解説を加えて限定してゆく必要が生じます。しかしながら、たとえそこでたった一人が残ったとしても、はたして目の前にいる生身の人間が、呼びかけた固有名に合致する人であるかを最終的に確認する方法はないのです。つまり、目の前の人物を最終的に固有名と一致させ、特定する手段をわたしたちは持ち合わせていないのです。戸籍謄本を取り寄せても、そこに記載されている人物が目の前の人物であると保証する手段はありません。戸籍謄本に書いてあるその人物の名前が本当に自分のことを指しているのかどうか本当は決めることができないのです。しかしながら、わたしたちは取り寄せた戸籍謄本に書かれている自分の名前を見て、これは自分のことだ、と騙されてしまっている。

ところが、精神病になると騙されなくなる。いわゆる正常な人は、言語がうまく機能し、言語の騙しの構造の中にもうまく取り込まれているのだけれども、精神分裂病になってしまうと「いや、これ、だって、戸籍に名前が書いてあるだけで、これ、僕のことじゃない」と、戸籍のからくりを暴いてしまう。

これは「来歴否認」という症状で、精神分裂病の患者さんに見られることがあります。この場合、自分は目の前にいるこのお父さんやお母さんの子ではないという疑いが生じます。実際に役所に向いて戸籍謄本を取り寄せても、結局そこに書かれているのは文字でしかない。そして、これは嘘だ、と直感する。

騙されない、ということ。そうすると問いはもっと根本的なものになります。「自分っていったい何なんだろう」というようなありふれた独我論的な領域を超えて、もっと根源的な「自分はどこに繋ぎ止められているのだろう」というような意味での「自分って何だろう」という問いを抱えたまま、不安な日々を過ごさなければならなくなります。つまり、騙されない人は人生のなかで彷徨い続けることになります。

ですから、わたしたちがこうして多少なりとも安定した生活を送っているということは、まず最初に、わたしたちはうまく言葉に騙されているということになるのです。ですから、こうやってよければ、人生を楽しめる人とは騙され上手な人、自分が騙されているということに気がつかないでうまく騙され続けている人、ということになります。

ここで最初のテーマに戻ると、「ラカンは臨床に使えない」と口にする人がいたとしたら、この人は自ら口にしたテーゼによって騙されているわけです。「ラカンは臨床に使えない」と誰かが発した言葉を受け入れ、それを反復している。つまり伝承しているのです。これは伝説とか口承文学などと同じレベルで、文字のない時代において、物語が口から耳へと反復され、増幅され、変調されて伝わっていくのと同じように「ラカンは臨床に使えない」という呪文だけが、伝承として伝わってゆく。本当のところは、使えるか使えないかはそれぞれの人が判断することであって、流言飛語のレベルで流すものではないのです。

厳密な話をすれば「使える」という言い方自体に間違いがあるといわなければなりません。なぜならば「使う」という表現のなかに潜んでいるのは道具的な発想です。言語学でいえば、ソシュールが登場する以前には「言葉はものの名称なのだ」というような素朴な考え方が主流でした。これを言語名称目録観といいます。ソシュールはその講義において言語は名称目録ではないということをおっしゃったのです。「ラカンは臨床に使えない」というテーゼも同様の問題を含んでいます。「使う」というのは道具、大道具を使うとか「何々を使って何々をする」という道具的な発想ですが、精神分析の知は、道具ではなく、道具そのものを構成している次元に及んでいるのです。わたしたちが言葉を構成しているのではなく、言葉がわたしたちを構成しているのだ、という逆説的な視点がここにあります。「わた

私たちは言葉そのものの「だ」という視点を導入している精神科医とそうでない精神科医では、自ずとクライアントに対峙するその仕方や治療法も異なってくるのです。

「ラカンは臨床に使えない」というデマゴギーの意図

それでは「ラカンは臨床に使えない」というデマによって、何が意図されているのでしょうか。端的にいうなら、このデマゴギーの助けを借りて、ラカンを打ち消したいのです。打ち消したいという意図は、往々にして父的なもの、例えば権威、命令、教条といった父の力に対する反抗や抵抗として生じてきます。どういうわけか、ラカンのものというのは父親的なものと結びつけられ易いようにみえます。ですからラカンを頭ごなしに批判したり、無化しようとするのは、その殆どが男性で、しかも父との間に何らかの葛藤を抱えている人が多いように見受けられます。ですから、女性の研究者や臨床家の方が、ラカンを素直に取り入れているようにみえます。その理由はおそらくラカン理論は父の論理だからかもしれません。

興味深いことは、ラカンに対して示された葛藤がフロイトに対しては肯定的な形に姿を変える。すなわち「ラカンは駄目だけれどフロイトはいい」と発言してしまう。自分の父に対する葛藤をそういう形であらわす。興味深いことに、精神分析に携わっている人で、ラカンとフロイトの両方を否定している人には殆ど出会うことがありません。要するに父親は二人いないということなのでしょう。ラカンは駄目だけれどフロイトはいいという論法に陥っている人は意外と多いのです。実はそうではなく、つまりラカン、フロイトは並列ではなく、ラカンはフロイトの一解釈者にすぎません。一読解者。つまりフロイトの著作や思考法に出会い、理解し、解釈し、そしてその思考法をさらに進化させ、モディファイして継承してゆくこと。こういう一連の因果関係をラカン派の精神分析では「症状」と捉えます。

ラカンの症状

インフルエンザのウイルスが身体に入ってきてそれで発熱するというのはひとつの症状です。つまり症状とは、外部から何か病因が侵入し、その個体において何らかの効果が出てくることです。ですから病因の場所と症状の場所が違うということが起こりうる。これが症状の基本的な性質なのです。

ですからラカンはフロイトの症状ということができます。そしてラカンの講義を聞いた、本を読んだ人が、ラカンは素晴らしいとかラカンはどうだ、というのもまたラカンの症状なのです。これはあたかも風邪菌とかインフルエンザウイルスが伝播していくのに似ています。症状なのです。ですから、精神分析に携わる人は、自らがひとつの症状を生成しているのだということをちゃんと把握し、絶えず自己分析を進めながら内的なコンプレックスを処理していくということをおこなってゆかなければならないのですが、そのためにはそれなりの準備が必要です。

たとえば、フロイトも読んだことがない、哲学書も読んだことがないという人がいきなりラカンの本を読んでも何のことも理解できないでしょう。重要なのはその先です。ここで「小賢しいことが書いてあるだけで何の訳にも立たない」と抵抗を形成してしまう人がいます。

ラカン思想理解のために必要な知識

それでは困ります。ラカンの思想を理解するためには様々な前準備が必要です。まず欠かせないのはソシュールの言語学に対する正確な理解です。言語名称目録観を脱して、わたしたちの分節している世界こそが言語によって構成されているという視点をきちんと身につけていることが肝要です。少なくとも、そのような前提なしに、ラカンの精神分析を理解することはできないでしょう。

もう一つは、少なくとも20世紀における哲学の流れを理解していることです。生の哲学、メーヌ・ド・ピランとかベルクソンとか。要するに生きた瞬間を称賛していくような哲学があります。つまり人間にかかわらず生命全体には躍動がある。これをエラン・ヴィタルといいます。生命というのはそういう風にして前向きに進化していく躍動を持っているという発想です。「驚くべきことに物理的な時間は流れない」という純粹持続の発想はわたしたちの心を驚かしました。それとはまた別にドイツ、イタリアを中心に現象学（フェノメノロジー）という考え方が現われてきます。現象学は存在という現象の根拠を意識に求めます。わたしたちが何ものかをそれと認める時には必ず意識が関与しているというのです。つまり存在論を含めてすべての根源は意識にあるとする立場です。ブレンターノ、フッサールから始まり、その流れを汲んで登場したジャン＝ポール・サルトル、マルティン・ハイデッガーなど、現象学から派生した思想は20世紀の中頃から後半に掛けて様々な分野に影響を及ぼしました。精神分析の分野ではビンズワンガー、メダルト・ボス、フランクルといった人の名前を思い浮かべる人もいるでしょう。つまり現象学は、現存在 Dasein というような考え方で発展してきて、精神医学では「現存在分析」などという動きが盛んになった時期があります。ちょうど学生運動が活発になっていた頃に重なっています。そういう思想の流れを汲んだ上でラカン思想に辿り着いていくことが必要です。もちろんフロイトの著作を読んでいることは大前提となります。フロイトの著作を読んでいないと、ラカンの言っていることがすごく軽薄に見える場合があります。特にマテーム（数学素）と呼ばれる数式を使ったり、記号を使ったりしますから、これらの記号の意味するところを理解するためにはフロイトを読んでいる必要がある。フロイトをちゃんと呼んでいれば、ラカンのセミナーを読んでも、あそこはフロイトの著作のあの箇所をパラフレイズしているのだなということがわかる。ラカンがセミナーを始めたのは、なんと50代になってからですが、学位論文を出してからかなりの年月の空白があるわけですが。その間、何をやっていたかという、フロイトの著作を丁寧に読み込んでいたのです。そしてフロイトによって触発されたラカンの思考が蓄積さ

れ、いわば満期を迎えた時に、セミナーを開始したわけです。

「ラカンは臨床に使える」という伝承的な発言をする人は、実はその人自身が自分の無知を表明してしまっているのだ、ということに気付かなければなりません。知識や経験に裏付けされていない人ほど、自らの父親コンプレックスに気づかないまま、ラカン思想を簡単に否定してしまう、ということがあるのです。

PAGE TOP ▲

[目次へもどる](#)

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
juin 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年6月発行 「セミナー通信 復刊第6号 2012年6月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====

Copyright 2011-2012 EURLCLINIQUE Division Culturelle. All Rights Reserved.